

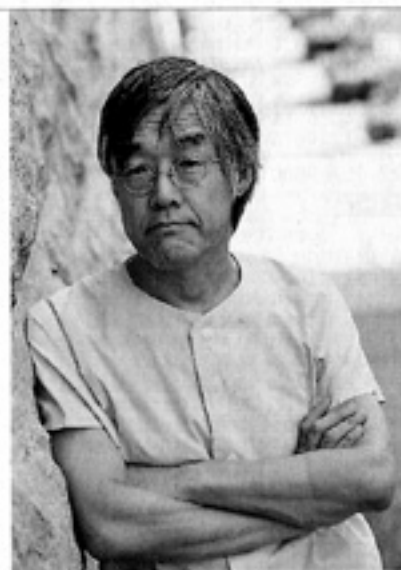
# 論壇時評

オピニオン

## つながる未来

## 一から創り出すということ

作家 高橋 源一郎



たかはし・げんいちろう  
1951年生まれ。明治学院大学教授。NHKラジオ「すっぴん！」の金曜パーソナリティ。近著『さよならクリストファー・ロビン』は、物語の登場人物たちが「虚無」と戦うお話。  
—西田裕樹撮影

何年前か、父親が病院で亡くなった時、その傍には誰もいなくて、翌朝駆けつけると、父親は哀しげに目を開いたまま、弟が手で目をつぶらせた。肩の荷が下りた、という気がしなかった。それから何年かたって、東京駅で倒れて1週間、集中治療室にいた母親が意識を回復することもなく亡くなった。ぼくと弟の家族が見守ったのだが、ぼくも弟も、ただぼんやりしていたように思う。

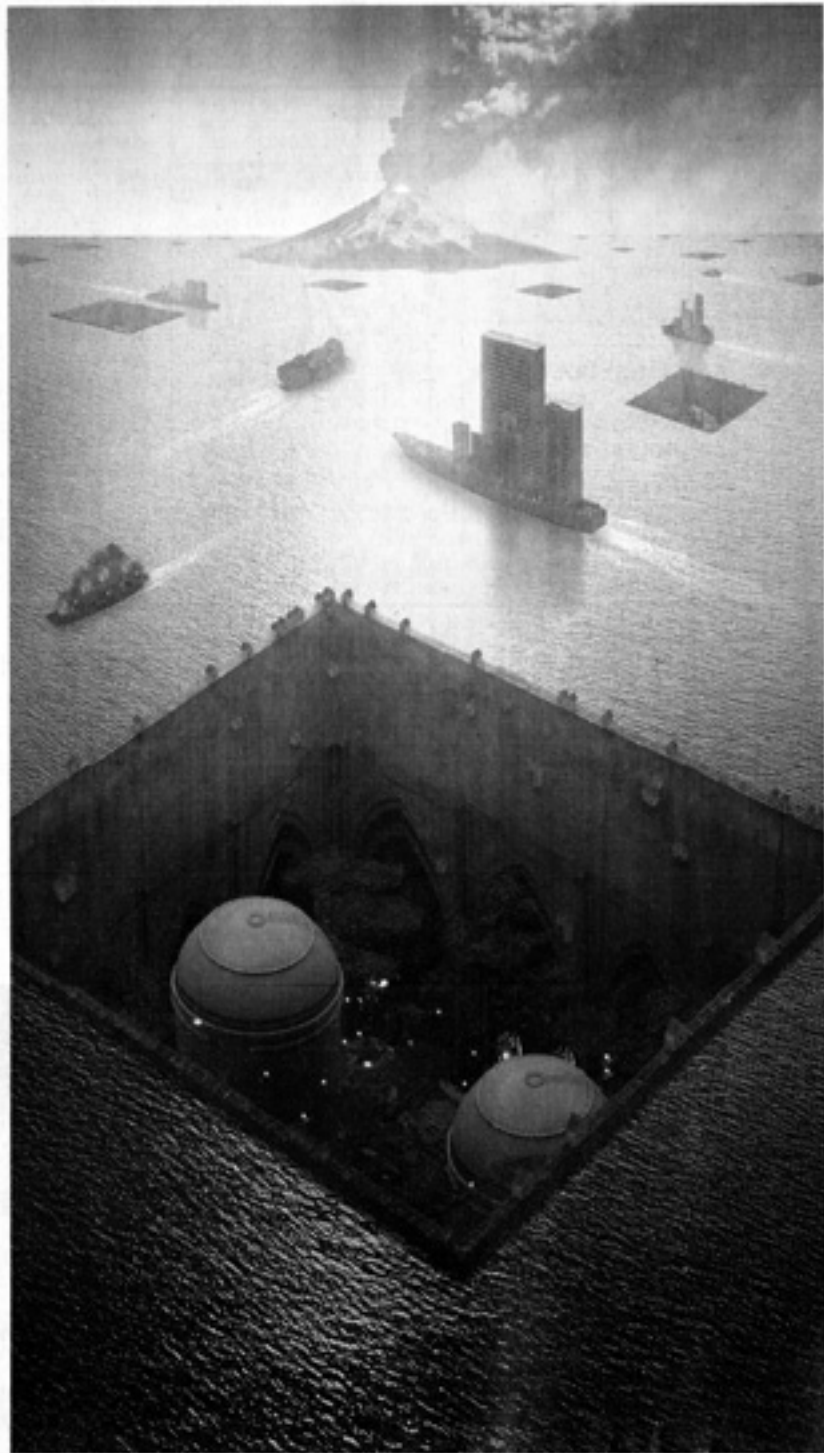
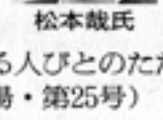
『いのちつぐ「みどりびと」』は、國森康弘さんの写真集(●)。國森さんは、滋賀県の小さな集落の人びとの暮らしを追いかけてきた。いや「暮らし」ではなく、どんな風に、亡くなっていくかを追いかけてきた。その小さな共同体では、

老いた人・死に近い人のケアに全力が注がれる。「死」が大切なもの、愛しいものとされてきた。小学校5年の女の子の大好きな「おおばあちゃん」が亡くなる。女の子の瞳から涙がこぼれる。けれども、最後に女の子は、「おおばあちゃん」にキスをして別れる。強い印象を与えるのは、死者に寄り添うその家族たちの、明るく笑いだ。「生ききった家族」を見送る視線の明るさだ。

この写真集には、たぐさんの「遺体」が写っている。でも、暗くも怖くもない。見ていると、心が穏やかになり、優しい気持ちが溢れてくるのがわかる。うらやましいと思う。そんな場所に住みたい、そんな家族の一員でありたいと思っ

ている自分を発見して、ぼくは驚く。多くの人たちは、最後は病院で死ぬものだと思っている。「死」は家から隔離されるものかと思いついて、淋しいとも感じていたのである。

- 國森康弘『いのちつぐ「みどりびと」』
- 吉田徹「いかに共同性を創造するか」(世界7月号)
- 石田雄・池田香代子・松本哉「『有象無象』が一番強い」(同上)
- 稲葉奈々子「『放射性肉』と呼ばれる人びとのたたかい」(寄せ場・第25号)
- 想田和弘「言葉が『支配』するもの」(世界7月号)



「テクノロジ」

CG・小阪淳

現代社会をイメージした作品を毎月掲載します。

吉田徹は「いかに共同性を創造するか」(●)の中で、いわゆるポピュリズムについて分析を行っている。世界中で、ポピュリズムといわれる政治勢力が跋扈している。彼らは、人びとの不満を煽り、時には、激しい宗教的な論議を訴える。吉田によれば、それは「保守政

しかし、そんなことが可能なのか。「『有象無象』が一番強い」という座談会(●)の出席者の一人は、それは可能だ、というのである。

「一九七四年生まれの三七歳」松本哉は、東京・高円寺でリサイクルショップ「素人の乱」を営む。彼(ら)を有名にしたのは、さまざまなデモだ。とりわけ、3・11後、大規模な脱原発デモを組織したことだ。では、どのようにして、松本たちは、それをなしとげたのか。

外部からやって来た連中が勝手に騒いでいる、というよくある批判に対して、松本は、こうするのである。

「実は店や地域のつながりで集まってきた人もたくさんいます。ネットだけではなく、直接の人間関係が非常に大きな力を発揮したように思います」

そして、松本は、その一つとして、「一人で住んでいる高齢の方に配達や買取に行く、お茶やご飯を出してくれてなかなか帰れないこともありますね」と例をあげるのだ。

目の前に、忘れられた人がいる。もしかしたら、「家族」からも忘れられた人なのかもしれない。そんな人たちの「家族」に、松本はなるのである。彼らの声を「代弁」し、受け止めるのは、いわゆるポピュリズムの政治家なのか、松本たちなのか。いま、その戦いが始まっている。

稲葉奈々子は「『放射性肉』と呼ばれる人びとのたたかい」(●)で、フランスの原発下請け労働者をとりあげる。社会的立場の微妙さから日本で「原発シブシー」と呼ばれるように、フランスでは彼らは「原発ノマド(遊牧民)」と呼ばれる。危険におびえながら、全国を渡り歩くために「家族と生活する権利」さえ剥奪された彼らは、やっと「自分の声」をあげることを選択する。

「『すべての原発下請け労働者の健康のための市民団体』が、フェカン市で二〇〇八年に設立されるまで、原発下請け労働者みずからによる、権利擁護の運動は存在しなかった」のである。

彼らは「労働運動」であることを求めない。それは、想田和弘が、「言葉が『支配』するもの」(●)の中で言っているように、「労働運動」という言葉もまた「リアリティを失い、賞味期限が切れてしまっ」ているからなのかもしれない。なにもかも一から創り出すしかないのだ。言葉も「家族」も政治も。そこにしか、未来はないのである。